

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十二年十二月一日発行(毎月一回)日発行
第十七巻第八号(通巻第二〇〇号)

鈴



ぐるっけ

創刊二百号記念

俳句雑誌

GLOCKE

第200号

12. 2010

阿波の泥

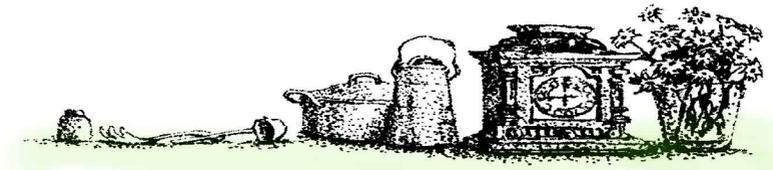
品川 鈴子

吹き溜まり落葉にしやがみ喫煙派

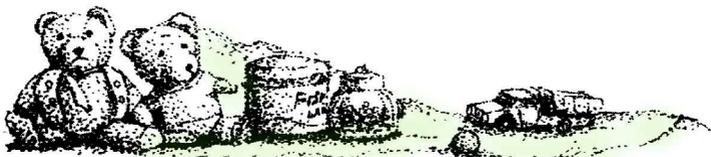
寒雷にふいの告知は二昔

風花の幾いく片はら纏むすふ骨納め

外套の衿に潜みて衣装黒子



新米の二合御強に句碑自祝
蓮根掘る深き粘土に足搦め
蓮根の肘膝泥に鎧はれて
箱詰め蓮根に阿波の泥セメント
ルミナリエのカリヨンに和す発車ベル
面差しの似る人形抱きルミナリエ



玉

鈴

吟

大阪 島本 知子

打ち取れば実には瘦せたる秋の蚊で
台風は狂喜している風車
人知れず生まれて死にし秋の蟬
薄さよりスピード重視梨をむく
花野道 寿限無 唱える女の子

愛媛 鈴木てるみ

芋煮会ひと口コンロ持ちよりて
村芝居 校長先生 悪役に
釣人が餌しかけたる秋渚
秋の蠅パン職人に打たれおり
コトコトと給食室の休暇明

大阪 鈴木 浩子

学僧の紺の夏シャツ給仕する
髪も眼も歯も借りものよ登山靴
偏食の孫を咎める生身魂
改築の長引く隣家 秋暑し
五寸余のみ仏笑ふ水引草

香川 陶山 泰子

鞆には小さき遺影 夏の旅
ところてん 酢みそで食す島の味
大西日 後ろに隠す鬼ヶ島
自転車漕ぐ炎帝に負けぬよう
さびしさと二人三脚 夏の果

岡山 瀬口ゆみ子

鈴虫を置きし窓 口旅券受く
白樺の湿原 歩み秋涼し
初風を誘ふ鳳凰堂 菩薩
約束を忘る夢 覚め昼の月
顔きに覚悟を示し 涼新た

兵庫 高橋 大三

浴衣着て大はしやぎする男の児
残暑なか何も探す腕時計
安徳宮跡に一本白木 榿
秋暑し 神戸事件の同型砲
秋の潮 エンジン轟音 水陸車

大阪 竹下 昭子

しづくくと文台捌き秋の蝶
歌声は力強いよ敬老会
名月や熱き吐息の犬散歩
望の月舗装道路の冷めやらす
秋芝居等身大の駅ポスター

大阪 武田ともこ

八月尽何事もなく爪のびる
仲違ひせしまま三年百日紅
深更にワグナーのアリア虫しぐれ
新穂 高秋の蠅まふ展望台
天高し僧の像指す槍ヶ岳

愛媛 武智 恭子

玉虫が宮より帰る夫の手に
救急車の音に目覚る熱帯夜
草の実に雀とびつく広き原
蓮の葉に水掛け遊ぶ親子連れ
萩の風枝伸びて道撫でてをり

大阪 谷 泰子

熟れ頃のメロン理系の夫が切る
卓上の小鉢に活ける花茗荷
連日の猛暑二の腕ひからびる
日焼けして集団登校新学期
送り火が消えて五山に闇戻る

愛媛 筒井圭子朗

観光の坑口に吊る鉄風鈴
遍路バス着く頃合の水を打つ
氷嚢を枕に連夜の熱帯夜
水打つて露地のほてりの柔らげる
継竿に鉤つけ栗を揺り落とす

兵庫 恒成久美子

赤々と提灯ゆらし山車もどる
大き蟻墓の供物をかぎつけて
うだる朝ハイビスカスのぱつと咲く
扇風機なまぬるき風御八つ食ぶ
蟋蟀のジャンプ炊事の足元で

大阪 角谷美恵子

鈴虫の長鳴きかすか市の昼
すすき原どこまで行くも人恋し
海老蔵のあの目を見たや秋気澄む
支へられれ幼も捕ふ下り梁
海を恋ひ「龍馬」と名付く濁酒

愛媛 年森 恭子

長き夜言葉少なに二人ゐて
ひぐらしにかの残像のよみがへり
新涼に包丁の音かるくなり
手つかずのまゝの原稿秋暑し
山里の小中合同運動会

薬草歳時記

(二九九)ワタ(棉)

八木紀子

名月の花かと見えて棉晶

芭蕉

汗拭く、手拭く、体を拭くや、さつと水が消える見事な木綿の吸収性です。北風吹く寒い夜も煎餅蒲団にくるまれば暖かだ幾万もの人が命を永らえた事でしょう。この綿を生む棉とは一体：原種(多年草)はアフリカとアメリカにワタ属(15〜20種)が分布、その数種が改良された栽培種(一年草)です。七九九年棉種伝来、一五九四年、明よりの木綿種を大和に植えたとか、以来麻、絹に替わり稲、麦、棉と連作もでき重要な繊維農作物であった。明治の機械工業化で綿の供給が追いつかず家内工業(綿繰り機で繊維と種を分け唐弓で綿打ちほぐし糸紡ぐ)が廃れ種は輸入され国内生産が消えた。種子の大半はアメリカ産で近年有機栽培綿や茶綿も盛んです。

一日水につけたアジアと米産の種を六月三日に蒔き七日後に発芽。八月一日オクラの花そっくりの可憐な小さなアジア綿の花が咲き、六日には大きな葉の陰で真っ白な5弁の米産の大輪花が咲き、二日目半開きでピンク色に芙蓉のよう、三

日目しばむや否や日毎膨らみ桃に似た緑の実は固く種子がしっかり育っています。実を煎じ催乳薬 根皮で通経陣痛促進剤に、綿実油は食用油や石鹼に、ガーゼ脱脂綿は医療や生活の必需品です。枝葉は染色その他火薬や化学繊維の原料に、搾りかすは家畜の飼料です。九月十七日夕刻水撒きに出たらなんとアジア産の小さな棉の実がうつむき加減に白いそうあの綿が：フワフワと、この優しい感触は生まれたての赤ん坊のようで仄かな甘い香りが漂って来るようです。繊維が短く蒲団用。三日遅れてアメリカ産の大きな綿が溢れんばかりに上向きで力強く開紫です。なんと遅しい！お日様の子かな：この長い繊維は衣類用です。いずれも種からびつしりと綿毛が生え繭のようで黒い種を見付けるのが難しいです。この日を境に明治三十一年以来過去百十三年で最も暑い夏が去り一気に涼しくなりました。二〇一〇年猛暑とゲリラ豪雨の夏のおわりです。

世界の主要な栽培ワタ(一年草)

アジアワタ(キダチワタとシロバナワタ)

アメリカワタ(海島綿と陸地綿)

花言葉は偉大さ 棉の花夏の季語

棉ふく・桃ふく 秋の季語(棉の実の開裂のこと)

参考文献

『はじめての綿づくり』日本綿業振興会

『綿の郷愁史』東京書房社

『日本薬草全書』新日本法規

『原色牧野和漢薬草大図鑑』北隆館

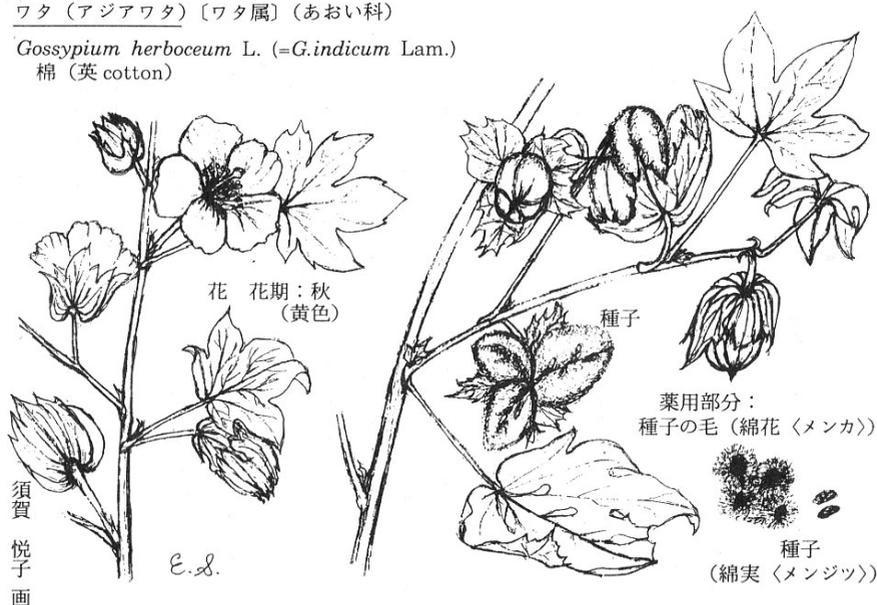
著者略歴

神戸薬科大学卒

ワタ (アジアワタ) [ワタ属] (あおい科)

Gossypium herboceum L. (= *G. indicum* Lam.)

棉 (英 cotton)



須賀 悦子 画

綿を摘む下校のセーラー服を替へ	水色のブルカの女や綿の花	いつまでも白し綿の実玄関に	旅路来て綿紡ぐてふわぎに付つ	棉の実を摘みぬてうたふこともなし	胸にかけし袋ふくらみ棉を摘む	白骨もみゆ畑の棉みのりぬる	洪水のあとに取るべき棉もなし	棉吹くや河内も見ゆる男山	徳山の蕎麦白妙や棉もふく
* 塩出	* 佐田	* 奥田	* 富安	加藤	山口	瀧井	正岡	野沢	向井
真一	昭子	妙子	風生	楸邨	青邨	孝作	子規	凡兆	去来

(* ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

ご救免の遠流に咲きし花門に 福井 木曾 鈴子

来ては翔つ家紋の揚羽蝶忙し

点滴の漏るる青痣秋暑く

一碗に松韻籠めて月茶会

ふる里の共同墓地の月涼し 大阪 宮村フトミ

続く暑に卵小振りとなる鶏

銀行の窓口麦茶ふるまわれ

さくらんぼ詰め放題にあと一つ

ジャンボ機と力比べの子等暑し 東京 堤 節子

黒蛇は親亡き家の留守居役

留守勝ちの庭に濃い目の除草剤

防災訓練こほろぎも居る体育館

わらべ唄われも鏡も夕焼けて 山口 山本 敏子

ふくらみつつ又細りつつ蟻の列

天瓜粉は知らぬと若き薬剤師

湖にひらく窓より夏惜しむ

米寿とは重たくもなし夕端居 愛媛 羽生きよみ

水を撒く米寿の身にも水欲つし

夏生まれ妣の口癖親不孝

怖きもの間はれ鏡と敬老日

秋灯下文字読みづらき文庫本 兵庫 先山実子

値上げとて煙草買込む秋暑し

まといつく葛に街灯仄暗く

湯疲れに寝ころんで見る宿の月

肩寄せて無縁墓百秋暑し 兵庫 福島悠紀

ねんごろに仏壇拭ふ秋彼岸

仕分け手に蛸がすいつく午後の糶

秋暑し乾びきつたる手水鉢

秋茄子の色の鈍りて雨不足 愛媛 濱田ヒチエ

大薬缶煮出し麦茶を作る日々

秋暑し乳房手術の人見舞う

年を経て松の手入れも人頼み

落蟬や垣間見し世の如何ならむ 愛媛 城下明美

盆帰省十指に余る大世帯

秀 鈴 記

来ては翔つ家紋の揚羽蝶忙し

木曾 鈴子

平氏は皇族賜姓の豪族で、桓武・仁明・文徳・光孝天皇の子孫。かつて都から落ち延びた辺りにその屋敷が残っている。伊勢では伊勢平氏と呼ばれ、能登や祖谷などにもひっそり暮らした。その家紋は揚羽蝶だから、互いに揚羽蝶と化して訪ね合い、心を通わせてはそそくさと飛び去る。

さくらんぼ詰め放題にあと一つ

宮村フトミ

さくらんぼは誰にも好まれる味と形だが、出始めは高価なのでちよつと庶民には手が出難い。たまたま「詰め放題」の特売に出くわしたので、主婦の腕に縊りをかけて試してみる。あと一粒入りそうだが、無理をするとデリケートなさくらんぼは皆台無しになるかもと手を止めて、ここが思案のしどころ。

ジャンボ機と力比べの子等暑し

堤 節子

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 小阪 律子 //

*選句は全て 品川鈴子

ジャンボ機に結んだ綱に大勢の子等がたかつて力任せに曳くのだろうか。まるで横綱に飛び掛かるちびっこ力士のようで、火を見るよりも明らかな勝負でも、本気で挑むいじらしさ。この炎天下さぞや暑かるうに。

ふくらみつ又細りつつ蟻の列

山本 敏子

蟻は一匹の女王 蟻を中心とした社会生活を営む昆虫である。その蟻が一筋の縦列をなして行くことを蟻の門渡りと呼ぶが、作者が見られたのは正にこの光景。膨らんだり細ったりしながら休むことなく移動する蟻の行列はどこまで続いているのだろうか、ファールブルの心境で眺めておられる。

怖きもの問はれ鏡と敬老日

羽生きよみ

老人を敬いその長寿を祝うために設けられた敬老の日。祝ってもらおうのは嬉しいが、この日が来る度に年は一つ増え、鏡を見ると紛れも無く年を重ねた自分がいる。それを“怖きもの”と言われたが、この言葉の裏側には、鏡の前

でシャキッと背筋を伸ばして御酒落を楽しんでおられる作者の姿がある。自分を客観視した軽妙洒脱な表現に感服。

まといつく葛に街灯仄暗く

先山 実子

秋の七草の一つである葛は古代より日本人の生活に深い関わりを持ってきた植物である。茎の繊維を緯糸にした葛布は狩衣や袴に作られ、今日でも襖などを貼るのに用いられる。又、その根からは葛粉が作られ、奈良県産の吉野葛は有名。そんな葛の生命力は凄まじく、気がつけば街灯の妨げになる程に蔓を伸ばしている。場所は問題だが、紫色の蝶形花が風に揺らぐその姿は秋の風情そのもの。

ねんごろに仏壇拭ふ秋彼岸

福島 悠紀

秋分の前後一週間の秋彼岸。代々の人々を祀る仏壇に毎日礼拝される作者は、彼岸を迎えるにあたり、いつもより念入りに心を籠めて仏壇を磨き上げられた。この後はきつと秋の美しい花と故人の好物を供えられたことだろう。

秋茄子の色の鈍りて雨不足

濱田ヒチエ

今年はいつまでも続く猛暑に加え、雨が少なかったため

か、あの美しい茄子紺も少々色褪せ、表面の皮にひびが入ったりして出来がよくない。味はどうだったのだろう。見掛けの割にはおいしかったのかも？

秋野菜御数のやうなお味噌汁

城下 明美

暑い夏も水遣りを欠かさず、雑草をぬいたり害虫を駆除したり…と手を掛けてこられた結果、菜園では何種類もの秋野菜がみごとに育った。それを持ち帰り味噌汁の実にされて食卓に出された。具沢山の一品はそれだけで御数になりそうな程のボリューム。日常生活の何気無いひとこまが体に優しい一句となった。

長き夜を喋り尽して女旅

岩木 眞澄

秋の夜長は読書に、団欒に…と人それぞれの過ごし方があるが、作者は生活の場を離れて旅に出られた。美しい景色を眺め、風土色豊かな名所旧跡を訪ね、温泉に入り、御馳走を食べ、そして迎えた女性ばかりの夜。日頃の雑事から解放され「喋り尽して」更けゆく夜は、さぞかし楽しかったことだろう。(以下略)